

ている。よい知恵をお持ちの方は御一報頂きたい。

紅 葉

木 内 信 蔵

今年は10月上旬に北海道でモミジを眺め、またいま11月に東京の秋色を楽しんでいる。本郷・お茶の水、駒場などの構内のイチョウは言うまでもなく、成城の町や多摩御陵近くの並木のイチョウもみごとである。東大を退官した記念に自ら庭に植えた若樹も季節を知らせてくれるように育った。

ある和独辞書を引いたら、「紅葉 gelbe Blätter」とあった。黄葉の間違いかと言われようが、西ヨーロッパには紅葉が少なく、カシ・マロニエは茶色になるので、紅葉が美しいのは日本や中国合衆国東部で、大陸東岸気候と関係があらうが、和英辞書に「red leaves」とあるのはいかにも機械的で、むしろ「autumnal tint」の方が情景を伝える。

富士山麓の春は梨が原の可憐なフジコザクラが盛りを告げるが、秋は東大寮のカエデとカラマツが山中湖畔を行く人々の足を留める。家の軒先は大葉のカエデがあるが、今年は文化の日にはまだ殆ど朱色にならなかった。年々の気温や日照がどのように関係するか。近所の日当りのよい紅葉はみごとに朱と黄に染められているから、平均のデータだけでは説明できない。

記憶に残るみごとな紅葉は、1940年ごろ石井逸太郎、小寺廉吉両先生をはじめ富山地学会の方々に案内されて訪れた樺平のそれであった。明治節の空はまことに高く、山頂は雪化粧をして中腹は紅葉、黒部は濃い蔭を落として緑がのこっていた。1936年10月にはシャイドル博士(ウィーン)、大久保武彦氏と上高地に行ったが、穂高から梓川の谷に向かって紅葉が下りてくる断面をみることができた。高山のみでなく、多摩丘陵の雑木が色付くのも美しく、都市化で失われるのは惜しいことである。中山の秋は余り知らないが、9月末のアパラチアはそろそろ色付いて「もう10日もすると満山燃えるようですよ」との説明から想像するのみであった。

雲り日の紅葉も棄て難く、深まる秋の思いを一しお濃くする。しかし陽を受けたカエデやイチョウの一枝一枝はゴシック寺院のステンドグラスを透る光のように輝いて、杜の精が舞うようである。山野を飾る紅色は、ハゼ・ウルシ・ツタ・ヤマブドウなどがあり、サクラ・ミズキ・ニシキギ等も

それぞれの色合を競う。黄色系ではポプラ・カラマツ・シラカバ紅褐色ではケヤキなどがある。

シェラー博士と東京から福岡に飛んだ1959年11月下旬の機上からは、中国山地が一面にあかくブナ林が燃えていた。後年、広島から松江へ抜ける木次線の県境付近はスイッチバックをくり返し喘いで登る蒸気機関車の汽笛が紅葉の谷に木魂し、紅紫黄褐の斜面は陽に映えて体も衣も染まるようであった。

(1973. 11. 8 稿)

好きな形の川

籠 瀬 良 明

わたくしの生まれは黒部川扇状地のまんなか。ふるさとの土地や人々はこよなくなつかしいが、黒部川そのものはあまり膚に合わない。わたくしの生まれた家から白馬岳も鹿島槍もよく眺められたが、長ずるに及び、別の川、別の山を知ってから、ふるさとの山や川の魅力は半減した。いまわたくしの好みにぴったりなのは、山でなくて丘であり、急流でなくてごく緩かな川である。

この20年間、調査と自負しつつ、実際は大河の風物を楽しんできた。それらのうち、もっとも美しい印象を残しているのが、北海道の北のはてを日本海に向って流れる天塩川である。わけでも昭和36年5月の数日、この川のへりを、主として車ではあったが、ゆっくりと調査した時の思い出は尽きない。ある日は北海道開発局の調査船セキレイ号に、幌延の若い工事事務局長と二人で、流れるともなく流れる清流にモーターの音を残しながら下った。蛇行に身をまかせて兩岸の土地を観察したり、思い切って岸からはいあがって土を採取したりもした。水面にも、丘の上にも、人一人いない広野。山はだはまだ冬の装いを脱し切っていないが、空の青、水の青は初夏を思わせた。

半月前に終わったという融雪洪水がおいでいった砂——つまりもっとも新しい自然堤防堆積物にも心をひかれた。その融雪洪水が、上流からの雪氷の大塊をぶっつけて橋が破損した箇所も見えた。

河岸に立つと、はてなく続く熊笹の原があり、ボーリングステッキをつっこむと、厚い泥炭層。風景はあくまで単調、環境は唯々静寂。丘に登り、蛇行の流れを高所から追う。緩流河川の魅力に、ただただ陶然。

美しい緩流河川は西日本にも少なくない。その中でわたくしの好みに合ったのは京都府北部の由良川と四国南部の四万十川である。いずれの川も、鉄道から見離されていて、自然の風物が素ぼく